

ある夜の奉唱

静謐の響くカテドラル
その響きを反転させるような声
そして静謐を抱擁する嵐のうなり

あなたがたにはもう、葬るものさえない
あなたがたは、ここに死を葬り
さらには生までもも葬ってきた

死は死として歌われよと私は希う
苦渋に歪められた終焉としてではなく
穏健で麻痺された開始としてではなく

生は生として歌われよと私は希う
それだけでは完結しない単なる過渡期としてではなく
無意味に並べられた時間に操られる者としてではなく

静謐、歌、嵐　この三身一体によって
ドームの天井に描かれようとしている
離脱した自己、放棄された自己が

嬉々として浮遊し踊りまわるそれら
しかし同時に空しく生・死を見やるそれら
呼び寄せられるようにここに漂着するそれら

歌としての自己
歌としての生・死
自己としての、生・死としての歌

既に歌から言葉は抹殺されてしまった
あなたがたに葬られた言葉
言葉なきこの歌をもって我々は祈るしかない

(2001.9.23)